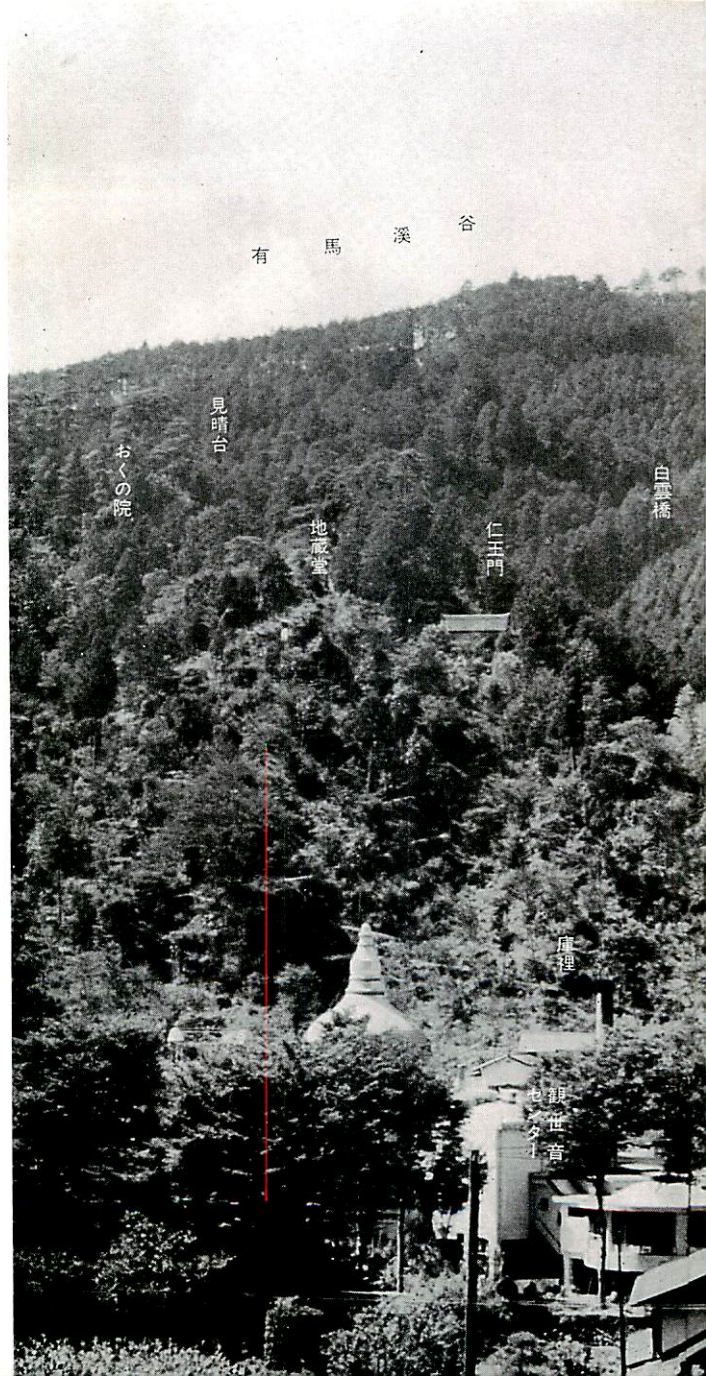


# 白雲山 鳥居観音のしおり 4

十月一日発行



# 鳥居観音の由来と七観音 (其一)

平沼弥太郎 号 桐江

は し が き

白雲山鳥居観音が発足してから、七観音が完成して、増築された本堂に奉安される迄の二十七年間の由来を、御承知のお方もあります。其の間のあらましを記して見たいと思います。

## 母信行院の信仰

鳥居観音が、建立されて今の様に発展することになったのは、開祖である母信行院が私に乗り移って居ったと思えません。

母は非常に質素な人でありまして、其の一例を挙げると、布が薄くなったり破れたりすると、何度も継をあて糊をつけて張板にはって干し、大切に保存したもので、継いだところの方が多いうぐらいでした。

消費が美德と云われる現代では、全く異様に思われるでしょうが、平沼家が今日あるのは、母の

この精神があつたからだと思ひます。

又母は色々苦勞した方ですが、非常に忍耐強く、殊に、異母弟妹十一人を何等差別なく、立派に育て上げた有様は、観音様としか思われず、頭が下るばかりでした。

母は毎月十七日に、近所の人を集めて、観音経や御詠歌等となえて、お茶と御菓子位で、なごやかに一夜を過す集いを、二十数年間もつづけて居りました。

母がお祭りして居った観音様は、高崎観音から買つて来たと思われる、十五センチ位の焼物の小さな白衣観音でありまして、現在鳥居文庫に遺品として大切に保存されて居ります。

又其のお厨子くしは、箱にとびらをつけた様な、簡単なものでありました。

そしてそばの柱には、お賽銭さいせん箱が取りつけてあつて、それには「このお賽銭をもとにして、観音堂を造るつもりです」と書いてありました。

## 鳥居観音建立の発願

母はこの様に色々と苦勞をした為もありましたが、四十八才の若さで亡くなりました。

生前私に、このお賽銭をもとに、観音堂を小さくてもよいから建てるようにと云われて居り、或る時は母と共に何処が良いかと山の中を見て歩いた事もありました。

母が亡くなってからお賽銭箱をあけてみると、一厘錢・五厘錢で二十余年間に七十余円という当時としては大金が出て来たので、この有難い浄財をもとにお堂を建てるべく一時銀行預金としておきました。

ですから母が鳥居観音の開祖であります。

其の後、私は多忙にまぎれて、心ならずも十数年を経過してしまいました、今から考えると実に親不幸な男だつくづく後悔しております。

ところが日支事変もだんだん拡大して、遂に大東亞戦に突入し始め、予・後備役兵は勿論、國民兵迄召集される様になったので、私にも赤紙がいつ来るか知れないと思ひ、軍刀や双眼鏡等を用意

して居った時母の遺言が稲妻のように私の心をうち、若し観音堂を建てずに出征して戦死しあの世で母に会って聞かれたら大變と、ここに大急ぎで観音堂を建てようと決心致しました。

場所は現在の奥の院のところにお堂を造ることに定めて、私は岩を穿ち、道を造り又白雲山境内の樹木の間伐をする等一生懸命努力したのですが、邦彦・康彦等子供も蜂にさされながらよく手伝ってくれました。

### 三木宗策先生へ弟子入

其の頃、私は下手の横好きで彫刻をやって居たので、御本尊を自分で彫刻したら母も定めし喜ぶだろうと考えましたが、それには佛像彫刻の先生について習う必要があるが良い先生がなかなか見つからず困って居たところ、帝展に佛像彫刻の第一人者である三木宗策先生作の聖観音が出品してあって、丁度折よく会場にて先生にお目にかかる事が出来たので御願ひした処、心よく弟子入りを許されまして、お蔭で佛像彫刻に転身する事が出来、鳥居観音を今日あらしめたのは、全く観音様

の御引合せだと、有難く思つて居ります。しかし御顔に威厳とか、慈悲の相が出て来ないので、苦しんで居た処、本郷の大円寺の御住職から「素人が信者の拜む仏像を彫るなどとはもつての外だ」と、一喝されたので、此処に始めて、信仰心が無ければ駄目だと悟りました。

## 西国三十三ヶ所巡礼

先づ西国三十三ヶ所の観音霊場を巡礼して、信仰心を養い乍ら、良い仏像を見て勉強しようと思つて、時の聯隊区司令官に御願いした処「行先を明かにする様に」と許されたので、昭和十二年の秋、西国霊場巡礼にと出かけました。

此の司令官は、宇都宮六十六聯隊で世話になつた人で、彼のノモンハン事変で悪戦苦闘し、人情部隊長として勇名を轟かせた須見新一郎閣下で今札幌に其の記念碑を建てて、戦死した九千余名の部下を供養すべく奔走して居られます。

私は先づ心をぶち直さねばならぬと云う真剣さもあったためか、乗物その他非常に不自由であつた時節にも拘らず、観音様や母に導かれた御蔭

で、非常に順序よくスピードに順拝出来た上沢山の良い仏像を研究し、幾分自信も出来ました。

## 聖観音

写真、正面中央

左、梵天 右、帝釈天

聖観音と御脇立ちの梵天・帝釈天も三木先生の御指導で出来上り、お堂も中里先生の設計で、舞台式に岩窟に完成したので、曹洞宗管長鈴木天山猊下御導師のもとに、開眼・落慶式を挙行する事が出来たのは、戦争も追々甜々な昭和十五年四月で、この歳が鳥居観音開山の嚆矢であります。

其の後山麓に本堂が新築したので、此処に七観音を揃えるため、聖観音・梵天・帝釈天をお移して、このお堂は奥の院となつて居ります。

## 仁王尊

其の後観音様の門番である仁王尊を彫刻したくなり、先づ名栗にアトリエを造り、用材には周囲三米位の平沼家の一番大きな檜を二本伐採して、仁王様の彫刻に取り組みましたが、二・六米もある大作なので実に難しくて、其の上戦時中は県木材会社・森林組合・県会議員等、銃後の仕事に追

われ、又戦後は、参議院・埼玉銀行等に關係して居つたため非常に多忙でしたが、三木・村岡諸先生の御協力を得て十二年の歳月を費して漸く完成する事が出来、仁王門も中里先生により見事に出來上りましたので、信者多数御参列を得て、有馬老師の御導師により開眼・落慶式を、挙行する事が出来ました。

其の時、平林寺の大休老師が誦經され「喝」と云う大声を出されたのが、全山に響き渡り、参會者一同が吃驚仰天したのが印象的でした。

## 地蔵尊

三十三ヶ所の靈場巡拝の折り、或るお寺で実によい地藏尊を拝んだので、之を彫刻したくなり、仁王様の彫刻材の根株の処を利用して、総高一・六米の地藏尊を彫刻致しましたが、台座迄一木取りである事が珍らしいと思います。

膝にだいて居る小供は、孫の宏之が一才頃の姿をモデルにしたものです。

お堂は、檜の節の処が沢山余つて居たので、この大節を利用して建てたのですが、之は無節材で

造るより面倒でありました。

## 七観音の彫刻発願

本郷の大円寺にお参りした時、三木宗策先生作の立派な六観音が安置してあったのを思い出し、私も七観音を彫刻して見たいと発願致しました。

其の後大円寺の六観音は、戦災で焼けてしまつたと聞きましたが、この国宝的な仏像を、東京の真中の、然も木造の寺院に置くとは乱暴だと、今更惜しまれてなりません。

天台東密では、六観音は聖観音・千手観音・不空羂索観音・如意輪観音・馬頭観音の六体でありませんが、真言系では、是から不空羂索観音を除き、別に准胝観音を入れて六観音として居ります。

処が仏教はもともと釈迦一本であるのに、宗派によつて、此の様にお経の解釈を変えて居るので、天台・真言両派を合せて七観音としても差支えないと考えたのです。

そして次の表の様に、手の少ない楽と思われるのから、順々に彫刻して行つて、二十五年と云う長い春秋を費して、漸く完成しました。

観音名	総高(米)	臂数 <small>てのかず</small>	製作年代
聖観音	一・四六	二	昭和一二
十一面	三・〇九	二	同 二七
如意輪	二・七八	二	同 三〇
不空羂索 <small>ぶくわんじやく</small>	三・八四	八	同 三二
馬頭 <small>ばとう</small>	一・六九	六	同 三三
准胝 <small>じゆんてい</small>	一・四六	一二	同 三五
千手	三・九〇	四二	同 四二

(カラー写真・参照)

七観音の御利益に就ては、山口平八先生が本年五月二日の鳥居観音大祭のおり、詳しく興味深く御講話になつて居るのでなるべく略します。

## 一、聖観音御利益 写真、前列中央

一般に聖観音の事を観世音、又は観自在とも云います、観世音とは世間の音を聞くのでなく、世間の音を観て、之に応ずると云う深遠な意味であります。又観自在とは一切衆生を正しく観て之を自在に救済すると云う意味です。

## 二、如意輪観音 写真、聖観音の左

如意輪とは如意宝珠と法輪とを組合せたもので、すなわち宝の珠が衆生の願望に応じ沢山の宝を与えるとか、仏法の武器である法輪を回転して衆生の迷蒙を打破する事自由自在であると云う意味であつて、衆生の願い通りに福と智を与えて下さる有難い観音様であります。

私の彫刻した如意輪は、左足がたれて手は二本である処から、弥勒菩薩と間違えられますが、如意輪観音にもこの形をしたのがあります。

衣の紋と台座の彫刻は、其の頃水玉模様が流行して居たので、凡て円形と陰陽の模様にしたのが特長であり、光背も変つて居ると思ひます。

東京の自宅には当時アトリエがなく、六畳座敷で製作したので、天井が邪魔になり、止むなく天井を打ちぬいて製作したものです。

納経式は塩入大僧正に御願致しました。

まだ名栗に本堂が出来て居なかつたので、火災を心配して、日興証券の遠山さんに御願して丸ピルの広い応接間に二年間置いて頂きましたが、場所柄沢山の方々から、美人だとか肉感的だとか、色々の面白い批判を頂き大分参考になりました。

### 三、十一面観音 写真、聖観音の右

十一面観音は埼玉銀行から、次の奉納書をつけて鳥居観音に奉納されたものです。

#### 奉 納 書

平沼頭取殿には昭和二十四年当行の頭取に就任され全支店に大黒天を安置する事を思い立たれ、二年半に亘り行務多端の間自ら九十九体を彫刻し全店に寄贈された、此の大黒天は行員賛仰の的となり、且つ取引先の間にも崇敬されて、ために各店が著しい発展を見たことは当行役員一同感謝申し上げる処である。又頭取殿は当行の重要な関係先や取引者の懇望に應じて観音や大黒天二百数十体を寄贈して当行の伸張に多大の効果をもたらしたことは頭取の偉大な御功績の一つとして感銘にたえない、かくの如き御功績に対し感謝の意を表し度く存じて居た処、今回白雲山鳥居観音本堂御完成に当り、沢田政広先生作十一面観音一体を御寄進申上げたので、何卒感謝の徴意を御汲み取り下され御嘉納下さる様御願ひ申し上げます。

昭和三十三年三月吉日 埼玉銀行

白雲山 鳥居 観音 殿

此の奉納書は、不空羅索観音の胎内に御納め致しました。

其の後銀行の支店も三十数ヶ所新設されたので銀行の御希望により、大黒天を追加彫刻致しました、又東京支店に回転する迦陵頻伽かりょうひんがやその他大作を四支店に取りつけました、其の他大口取引者や養老院等にも大黒天や観音の小品を差上げましたが是等を合せると、二十数年間に、五百体以上になると思いますが、私は多忙なので彫刻の先生に荒取り等応援をお願いした事もあります。

十一面観音はお顔が十一あります、正面は慈悲の相で、右に行くに従い憤怒ふんぬの相になって居るし又左側のお顔には牙があつて、笑う相がだんだん強くなって居りまして頂上には如来の御顔があります、是は時に応じあらゆる相になって、衆生を濟度して下されるし、又あらゆる災難や迫害から御救い下されて、平穏な生活に導き下され、死後は極楽浄土に御導き下さると云う大変な御利益を持って居られます。

合掌

以下次号

## 名栗の煙雨

清水市庵原町 松田江畔

十一時ちょうどに飯能へついた私たち一行は二十七人、飯能駅から六台の車に分乗して走り出す市役所前を通りすぎると、左側に名栗川の溪流が展開し、杉・檜の山々が前に横にと迫ってくる。

車の中までおおく染まるほどの新緑と、山合や谷々から立ち昇る靄の姿は、すでに都塵を洗い落しはじめた感じである。

原市場あたりまでの名栗川にはまだ南画的な巨巖や巨石が点在し、人家のたたずまいはかなり鄙びた美しさがある。

原市場から名栗に入ると、奥深くも来つるかなといった風景になる。靄はいよいよこく、その晴間に見える樹木はしっとり重い、所々につつじが咲き、藤の長房がたれ下ってみえる。

十一時四十分観音センター着、平沼夫人のお出迎えに恐縮しながら日本間に通る、小憩していると、センター独特の幕の内弁当が出る、これは仲気のきいたもので、味も駅弁よりうまい。

私達の外にはバスが三台ほど来ており、この団体客は二階の大ホールに陣取って、水前寺清子ばりの歌声が聞えてくる、昼食がすむと私達は全員で本堂に参詣、普門品の偈頌を誦誦し、桐江先生作の本尊聖観音を初め、七観音、沢田政広先生作の四天王、それに三面壁と天井の彫刻など、一々平沼夫人のご説明を受けて拝観した。

私はこの名栗へ毎年通い初めてからもう二十年になるが、しかも来る度に何かがふえ、趣きはだんだん加わり、荘厳さに頭が下るようになった。

一人の人が一念発起する時、一代でこれほどのものが出来るのである、いやまだまだこれ以上のものが出来つつあるのだ。

母上の非願を身に承けた桐江先生は、自からの大悲願に発展させ、そこから限らない金剛力が涌き出て来た、「自分が仏を作っているのではない、母に作らされているのだ」といつかおっしゃったが、身を以てここに到達された人の言葉だけに千鈞の重味がある。

都塵をはなれて、新緑、清涼、紅葉の観世音センターに杖を曳く人は何万人か数知れないほどに



なつた、これこそ観世音のみちびきである。

だがその中何パーセントの人々が本堂に詣り、更に玄奘三蔵塔、観音堂、山門、地藏堂と訪れて下さるであろうか、名栗の風景、白雲山の真の姿は、センターだけでは判らない、玄奘塔に参り、展望所に運び、廻って釈橋から観音堂までの幽邃な樹下をよこぎり、天を魔す老杉と老檜が醸し出す神秘的な雰囲気と接しないと判らない、切角宝の山に入りながら、この仙境の醍醐味を知らずに去られたのでは勿体ないことである。

本堂を出て道を左へとると数十歩で鳥居文庫のあぜ倉造様の建物がある、その左を少し抜けると大銀杏があり、去年の台風で芯と大枝が折れている、そこから玄奘塔方面への登山道が開かれ、自動車で登ることが出来る、この登山道はかなり急峻である、左側には小さな流れがあり、孟宗竹の林の外れに埴輪風の亭、流れの岸には梅が数十株畳々と実が成っている、右側にはつつじと梅と楓樹、その中腹に水野梅暁先生の墓がある、自然石に水野梅暁之墓と刻まれ、裏面に桐江筆になる銘がある。

玄奘塔は登山道入口から三百米の所にあり、外郭門を入ると日、支、印三国をとり入れて一つに調和された白亜の塔が巍然として立っている、塔内は地階に風流な休憩室があり、左右の壁面には水野梅暁、菊池寛実両氏の銅版像、塔の由来と賛助者芳名が大理石に刻されている。

二階には玄奘法師の霊骨、三階には大聖釈迦牟尼如来の御舍利が安置されている、一階から頂上に上る円形の階段の前後左右は見玉希望画伯の筆になる、玄奘三蔵法師の一代図巻の壁画である、混凝土壁に純金の線描法を用い、その壁は黒漆を使った荘厳なものである。

うっそうと茂る大森林で、亭々と大空を摩するもの数千本が白雲山の山容を一層整えている。

林の中を十分ばかり横に歩くと、どうだんと、つつじの林になる、もみの巨木が所々にあり、馬酔木も限りなくある。楓も何千樹となく茂り、その根元には高山植物の岩鏡が叢生している。

息心亭に憩い、観音堂の扉を開いて焼香する。

啊呷の仁王尊に礼して振り向くと、桜の大木に純白の藤の花が盛りこぼれん風情である。

子育地藏堂の前に、しばし白藤を賞で、更に京都御所の白雲木の孫木に蕾をつけたのを見る、二十余年の間に随分大きく伸びている。

山をひと廻りしてきて庫裡に坐り込み、快よく疲れた足を休めていると、雨は本降りになってきた、四面の山は夕もやがしのびよってきて、自動車の音も電車の音もしない。

庫裡の事務所で交通安全のお守を求めめるもの、どうだんの苗を買うもの、白雲墨を求めめるものなど、皆時間を忘れている。

センターへ戻って大浴場に一浴する、窓の外は名栗川で、川原は雨に煙り、河鹿の声がその中から高い調子で聞こえてくる。

一行は書道研究家が大半であるが、話が書に及ぶものはない、仙境の趣きに堪能し、身も心も洗われた感じである、センターの夕食も亦よい、主として山野菜を用い、それに鱒の塩焼きと色つけ程度にまぐろの刺味がついた、ふき、わらび、筍推茸の新鮮さは都会には珍らしいものである。

熟睡して覚めるともう朝の七時になっていた。河鹿の声が尚聞えているし、水の音も潺湲とし

て絶えない、肅々濛々たる烟雨である、一同鳥居文庫に入り、彫刻書画から梅暁先生の遺品、何百枚とある日中諸名家の写真などを拝観する、写真の珍らしいものはケースの中へ陳列してもらい書画も一部掛け替を手伝わせてもらう。

文庫の中にはあらゆる点から参考になるものが多く、無関心の人でも一見して参考になる筈である。これからも多数の人に見て貰いたいものだ。

文庫の中で半日を過したが、こういう連中も時にあつてほしいなどと勝手を言いつつ外へ出た。

雨はますますひどくなつたが「明日の天気予報によつては、もう一晩泊りたい」という奇特な婦人達も出てきた。昭和四十二年五月十五日記

## 桐江と言う号に就いて

平沼弥太郎

私の号の桐江（とうこう）を「きりえ」と読む方がよくありまして、鳥居観音に参拝される方で（きりえ）とは奥さんですかと聞かれるとの事です。又先日タイ、印度の仏跡を巡拝した時、同行の方から、次の様な手紙を妻の名で頂きました。

『貴誌御恵み賜り厚く御礼申上げます、奥様のタイ、印度の巡礼記、本当になつかしく想い出されて、再三念入りに拝読いたしました。誌中の写真を見て、御主人を思い出し色々と当時を追想いたし、感一層深いものがありました。（中略）御主人によるしく御伝え下さい』

此の手紙を見て妻と吹出して笑いましたが、そう思っている方が多いと思いますので、説明させていただきます。

桐江と言う号は、水野梅暁老師が、私が釣狂いの処から、次の蔽子陵の詩からつけられたのです。

一枝長繫碧琅玕

多在桐江渭水間

楊柳陰中驚鯉躍

夢花香裏伴鷗眠

未看使者重徵聘

幾見漁翁独抱還

長占烟波与風月

此生贏得出塵寰

此の詩の意味は或る翁（白楽天？）が釣竿や、びくをさげて、桐江とか渭水とか、言う川に出かけるのですが、舟釣をしていると柳の陰で、突然鯉が跳上るのに、よく驚かされたり、夢の花が咲き乱れて、よい香りが漂う、舟の中で昼ねをしていると、鷗がそばに来て一緒にねている。今日は

国王から迎の使者が来ないので吞んびりと釣を楽しむことが出来て助かる。翁は釣より浩然の気を養いたいのが目的なので、軽いびくをさげて帰路につくと、もやでかすみ、月が出て来て何とも言えぬ景色で紅塵（よごれた世の中）から一日解放されてよかったと言う内容です。何と言うのどこであり静かな詩でしょう。

私は二十年前迄は毎年月に二三回は日光の湯川に釣に行ったものです。湯瀧から戦場ヶ原に出る迄の間はうつ蒼とした原始林で処々に大木が川に倒れている幽すいな溪流をさぐりづりをするので。又戦場ヶ原では畑も家もなく、鶯や色々の鳥が鳴き、高山植物が咲き乱れておりまして下流の竜頭の滝上は、スイスの画にある様な美しい処で全く仙郷に遊んでいる様な気もになります。湯川は非常に曲りくねっているので四五日釣っても全部は歩けません。昼は釣った魚を全部焼いて持ち帰るに楽な様にし、又持参の米、味そ、じゃがいもなどで飯盒炊きさんをして、食事する事のうまさは忘れられません。どうせ昼間は釣れないので、ゆっくり昼ねなどして美しい景色を満きつす

るこの湯川の釣は丁度此の詩の気もちそっくりだ  
と思います。此の湯川の釣姿を彫刻して、文庫に  
置いてあるので御来山の節は御覧ください。

しかし仏教から言う釣は、十重禁戒中の不殺  
生戒にあたるので心がとがめて二十年來あまり釣  
竿をもちません。

## 白雲山の紅葉 岡部千昭

一雨毎に清浄な大気が、名栗谷に流れて、秋は  
日増に深くなってくる、十月下旬から十一月の中  
旬まで、白雲山の紅葉は美しくいろいろられる。

本堂の裏手の道を竹林の下から入って、曲折し  
たゆるい道を登って行けば、婦人、子供でもらく  
に行くことが出来る。

仁王門の前の広場にたどりついて、そこから附  
近の秋の景色を眺めるのが一番よく、この辺の紅  
葉は、黄と赤と橙のどれもが美しい濃淡を織りな  
して素晴らしいものである。

又この辺を場所をかえてセンターの屋上からな  
がめるのもよい。

仁王門をくぐって奥の院への横道は樹も古く樹

下に紅葉の色を投げて、行く人の頬を赤く染る、  
雨の日ともなれば、その雫の滴りが傘も染めるか  
のようである。

奥の院から附近を眺めてもよし、すぐに歩を進  
めて光の多い平らな所にたどりついて、休けい所  
に腰をおろして、心ゆくまで深みゆく白雲山の秋  
を探勝するのもよい。かたわらの岩かどの松の大  
樹のみどりが附近の紅葉に調和して一層美しい。

此処を出て横道づたいに行くと、古い松檜の林  
の中をぬける道がある、しばらくは紅葉ともお別  
れであるが、美林の中の空気は一層きれいで、甘  
いような樹々の香りが漂っているのが快い。

しばらく行くと、自然石で出来ている白雲橋に  
出る、そこに一筋の細い流れがある、橋を渡って  
少し急坂を登れば広場につく、正面に白亜の三蔵  
塔が秋の中空高くそびえて、あたりの紅葉に調和  
して絵のようである。

ここから遠く奥武蔵の山々が眺められて久方に  
心の安らぎと共に秋をしみじみ感ずることが出来  
るのである。

## 床しい野点

初夏もまだ初めの五月十八日、毎年一度は御参拝くださっている、国会議員の奥様方によって組織されている、睦会と言う会がある。その会の催で本年もはるばる名栗谷の初夏を探勝なされながら、白雲山鳥居観音にお参りいただいた。リーダーは故大野伴陸先生の奥様で君子さま、副リーダーは小林英三先生の奥様麻佐子さまにお仲間は村上和子様、青木保子様、小峰文子様、山口文子様、斉藤寛子様、植竹英三子様の方々に、どなたも七観音には心から感に入つたようである、それから山を散策なされながら本当にたのしそくに語り会っておられた。

つづいて本堂の裏手の竹林のかたわらの埴輪亭で野点を一服召されたが、林間の静かさの中は野点にふさわしく、蹲踞つづみに落ちる笥の水の音も、折からの竹の秋で、竹の葉の散りかかる風情もこでなくては味えぬものであった。

## 鳥居観音秋の行事

十月十七日 月例観音経読誦会

十一月十七日 秋季特別大祭、玉華門上棟式

御詠歌奉詠会

十二月 八日 釈尊成道会

十二月十七日 月例観音経読誦会

十二月卅一日 除夜厄払法要

## 結成講中について

昨年の秋以来、各方面から信仰厚い、講元各位の御協力により、観音講に深い御理解と、信仰を得まして会員に御加入いただきまして、御蔭をもちまして結成された講中も増加して参りました。

地元名栗講中等二十一講中がそれぞれの講名をもちまして結成されすでに五月一日、二日の特別法要には御参拝賜り、その後も御参拝いただいた講中もあります、今後予定されている講中もありますが、尚広くそして多数の信仰家によって新しい講が誕生いたしますよう心から御ねがいで結成講中の報告にかえさせていただきます。 合掌

鳥居観音のしおり 四号

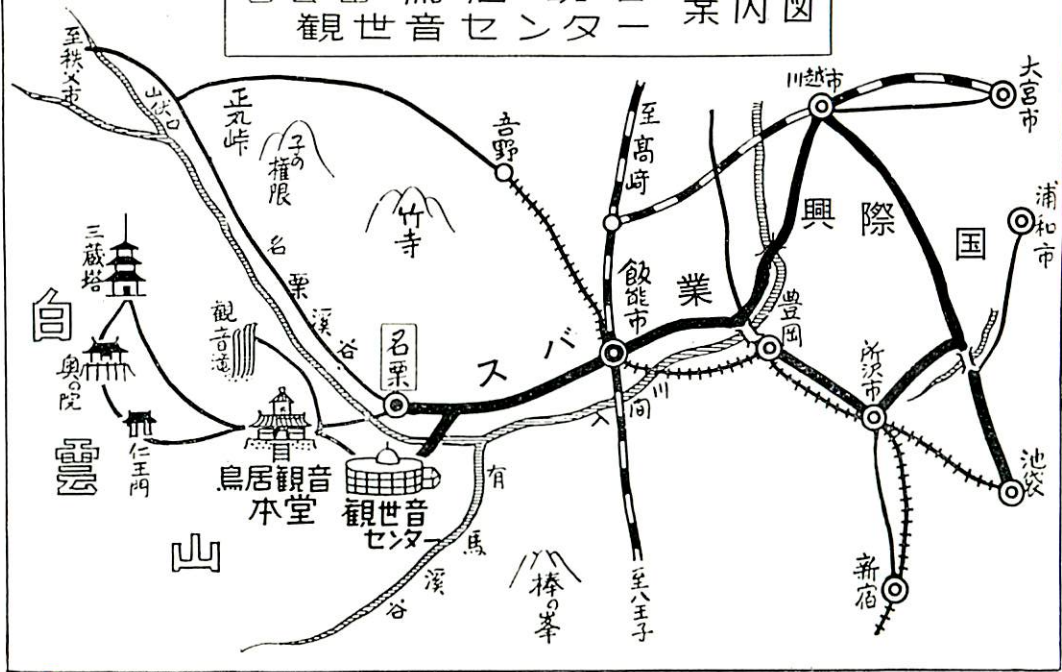
発行日 昭和四十二年十月一日

発行責任者 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部千三

印刷所 浦和市武州印刷株式会社

本号に限り 十円

白雲山 鳥居 観音 案内図  
 観世音センター



秋葉山

琴比羅神社

三蔵塔

面白岩

蛇の目筆四阿

→ 観音滝

壇輪利四阿

梅院之亭

梅月橋

本堂

鳥居文庫

名栗川



